

道主植芝吉祥丸先生監修

合氣道與義

(道歌)

編集

阿部醒石

戒  
毒  
合  
宜

# 前 編

## 奥意

一、武は萬有の根元にして我建国の一大精神なり。それ武術は皇国の道に起り百事神と人との合気より大和魂の武魂を心身に練及し誠の魂の真善美なる練磨統一をなし、心身に寸隙なき心魂一如の統一以て誠の人を作り、更に顕幽両界に練り合し世を挙げて大和魂を和合美化するを以て目的とす。

二、小にしては体は修業の道場にして心は修業者たるを忘るべからず。

三、主の大御神に同化し世界顕現至愛の御靈出の元に順じ修業すべきは武の最大の法なり。

昭和十一年十二月吉日

建遠日

合氣にてよろづ力を働かし美しき世と安く和すべし

ありがたや伊都とみづとの合氣十ををしく進め瑞の御声に  
あるとあれ太刀習つて何かせん唯一筋に思ひ切るべし

神ながら合氣のわざを極むれば如何なる敵も襲うすべなし

神ながら天地のいきにまかせつつ神へのところをつくせますらを

下段をば陽の心を陰に見て打突く剣を清眼と知れ

向上は秘事も稽古もあらばこそ極意のぞむな前ぞ見えたり

左右をば切るも拂うも打すてて人の心はすぐに馳せ行け

上段は敵の心を踏定め陰の心を陽にこそ見れ

上段は吾も上段このままに打突く槍をくつつして勝つべし

すきもなくたたきつめたる敵の太刀皆打すて踏込て切れ

前後とは穂先いしづき敵ぞかし槍をこたてに切り込み勝つべし

せん太刀を天に構へて早くつめ打逃しなば横に切るべし

太刀ふるひ前にあるかと襲ひ来る敵の後に吾は立ちけり

立ちむかふ剣の林を導くにこたては敵の心とぞ知れ

魂のあか破れ衣をとりのぞき天の運化に開き光れよ

中段は敵の心をその中にうつり調子を同じ拳に

敵多勢我をかこみて攻むるとも一人の敵と思ひたたかへ

敵下段同じ構への中段に上り下りに移りかむるな

敵の太刀弱くなさむと思いなばまづふみ込みて切るべし

敵人の走り来りて打つときは一足よけてすぐに切るべし

取りまきし槍の林に入るときはこだては槍の穂先とぞ知れ

人は皆何とあるとも覚悟して粗惣に太刀を出すべからず

日々のわぎの稽古に心せよ一を以つて萬に当るぞ武夫の道

武術とは神の御姿御心ぞいづとみ<sup>づ</sup>との御親尊し

ふりまはす太刀に目付けて何かせん拳は人の切るところたれ

まが敵に切りつけさせて吾が姿後に立ちて敵を切るべし

誠をば更に誠に練りあげて顕幽一如の真蹄を知れ

又しても行詰るたびに思ふかないづとみづとの有難き道

まよひなば悪しき道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな

口ふがら赤白魂也古  
況今風の子ちよ小の神技

武蔵今迄也首

# 後 編

合気とは愛の力の本にして益々栄えゆくべし

合気とは神の御姿御心ぞいづとみづとの御親とほとし

合気とは筆や口にはつくされず言ふれせず悟り行へ

合気とは解けばむつかし道なれどありのままなる天のめぐりに

合気とは万和合の力なりたゆまずみがけ道の人々

朝日さす心もさえて窓により天かけりゆく天照るの吾れ

天かけり光の神は降りたちぬかがやきわたる海の底にも

天かけりやみを照らして降りたちぬ大海原はよろこびの声

天照すいづ輝くこの中に八大力王の雄叫びやせん

天地に氣結びなして中に立ち心構えは山彦の道

天地の精魂凝りて十字道世界和樂のむすぶ浮橋

いきいのち廻り榮ゆる世の仕組たまの合気は天の浮橋

一靈の元の御親御姿は響き光りとぞ生れし言靈

伊都のをのこり靈はらう伊都魂を光の中にたける雄武び

古より文武の道は両輪と稽古の徳に身魂悟りぬ

現し世と神や仏の道守る合気の技は草薙ののり

美しきこの天地の御姿は主のつくりし一家なりけり

大御神七十五声を生みなして世の経綸をさづけ給へり

大御親七十五ツの御情動に世のいとなみはいや榮えぬる

教には打突拍子さどく聞け極意のけいこ表なりけり

己が身にひそめる敵をエイと切りヤアと物皆イエイと導け

おのころに氣結びなして中に立つ心みがけ山彦の道

おのころに常立なして中に生く愛の構えは山びこの道

かなながら赤白玉やますみ玉合氣の道は小戸の神技

かなながら練り上りたる御剣はすめよ光れよ神の恵みに

氣の御わぎおろちの靈出や蜂の靈出たまのひ出ふる武産の道

氣の御わぎ玉のしづめやみそぎ技導き給え天地の神

くわしほこちたるの国の生魂やうけひに結ぶ神のさむはら

声もなく心も見えず神ながら神に問はれて何物もなし

ことだまの宇内にたぎるさむはらの大海原は山彦の道

こんげんの気はみちみちてけんこんや造化もここにはじめけるかな  
三千世界一度に開く梅の花二度の岩戸は開かれにけり

三千年の御親の仕組成り終えぬよさしのままに吾はしとめん  
松竹梅錬り清めゆく気の仕組いつこに生るや身変るの水火

真空のむすびのなかりせば合気の道は知るよしもなし

すきの男の玉の剣は世にいでて東の空に光り放てり

主の至愛ひびき生れし大宇宙御いとなみぞ生れ出てたる

主の御親至愛の心大みそら世のいとなみの本となりぬる

すみきりしするどく光る御心は悪魔の巣くふすきとてもなし

生死とは目の前なるぞ心得て吾ひくとても敵は許さじ

大宇宙合氣の道はもろ人の光となりて世をば開かん

武産は御親の火水（いき）に合氣してその営は岐美の神業

たたえてもたたえ盡せぬさむはらの合氣の道は小戸の神技

千早ぶる神の仕組の愛氣十八大力の神のさむはら

つきさかきこり靈をはらういづのめのみ親かしこみ神のさむはら

常々の技の稽古に心せよ一を以て万にあたるぞ修業者の道

つるぎ技筆や口にはつくされず言ぶれせず悟り行へ

天地人合氣になりしいづの道守らせ給え天地の神

天と地と神と人とをむつましく結び合はせてみ代を守らん

道人のするどく光る御心は身魂の中にひそむ悪魔に

時は今天火水地や玉の緒の筋を正して立つぞ案内に

日地月合気になりし橋の上大海原はやまびこの道

火と水の合気にくみし橋の上大海原にいける山彦

日々に鍛えてはまたまたにこり雄叫びせんと八大力王

ふとまにと神習ひゆくみそぎ業神の立てたる合気なりけり

正勝吾勝御親心に合気してすくい活かすはおのが身魂ぞ

まねきよせ風をおこしてなぎはらいねり直しゆく神の愛気に

むらきもの我鍛えんと浮橋にむすぶ真空神のめぐみに

世を思い嘆きいさいつまた奮いむら雲の光は我に勝速日して

世の仕組國のみ親の命もて勝速日立つ天の浮橋

世の中を眺めては泣きふがいなき神の怒りに我は勇みつ  
呼びさます一人の相手も心せよ一を以て万に当る丈夫の道  
よろづすぢ限り知られぬ合気道世を開くべく人の身魂に

あとがき

前編は開祖盛平翁先生の戦前の道歌を後編は戦後の御作を五十音順に配列しました。かなづかいなど音韻を主にして、現代かなづかいでない所もあります。解説は全く致しませんでした。皆さんの心読・身読によって翁先生の真にふれて下さい。

終りに翁先生のことばでしめくります。

「昔から数多の賢聖や武の大聖が現れたりといえども、未だかつてこれを行なつたことがない。常盛も未熟ながら、この大道に入つて、今や最後の修業の最中である。世の中は全部、七十五の言葉によつてつくられている。常盛はわからぬが、必要なことだけをいただきたい、一つ／＼を感得して、武産合気のわざを生み出すことに一生懸命すすんで行く。」

何ども／＼心読されるごとに何かを悟って下さることを念願して  
います。

美しきこの世の情は  
高き作柄し家なほけり